

上田宜珍

上田宜珍よしうずは高浜村庄屋としての行政家で

更に歴史家・産業家・科学者・文学者などマルチタレントだ
庄屋として村政・郡政に尽力する一方

高浜焼・漁業などの産業振興をはかり

陶山経営では「陶山遺訓」を著し加藤民吉に秘法を授ける

伊能忠敬に測量術を学び 高浜村大火後の復興に活かす

天草の郷土史を研究し

「天草風土考」「天草年表事録」の歴史書を刊行

天草歴史学の元祖である

歌道を学び 歌人としても大成

「天草島長歌」「嶋の藻屑」と天草初の歌集を編む

これらは『天草嶋鏡』として纏められ

後世の歴史研究家のバイブルとなっている

文政十二年（1829）七十五歳で病没

戒名は「俊倫謙山良温居士」高浜村荒尾山下の墓地に眠る

加藤民吉

安永元年〜文政7年

尾張瀬戸村（現愛知県瀬戸市）に生まれ、文化元年磁器の製法を学ぶため九州へ向かい、上田宜珍の窯元で修業、その後、佐世保や肥前で修業を続け、帰国に当たって宜珍より上絵の技術を授かる。帰国後瀬戸焼の発展に尽くし、瀬戸焼の磁祖と呼ばれる。



上田宜珍 像 「天草島鏡」

附廻役の枠を超えた上田宜珍

伊能忠敬の天草測量に付き廻り役（付添人）として同行したひとり、高浜村庄屋上田宜珍である。

宜珍が、忠敬測量隊の附廻り役を、自ら名乗りを上げたか、あるいはお上からの指名であったかは分らないが、ここは、宜珍が自ら手を挙げたと見たい。

宜珍は、伊能忠敬測量の世話役として、常に近くで接しながら、忠敬の人柄に深い感銘を覚えるとともに、測量技術の習得に努めた。更に、「巡廻日記」を著し、忠敬の『測量日記』では窺えない、裏方としての測量の実態をより詳しく、後世の我々に伝えてくれた。忠敬の全国測量の間中、あまたいる付き廻り人の中で、宜珍ほどの「付廻り日記」を記した人はそう多くはないであろう。この宜珍の記録は、膨大な「上田家文書」の中に遺されているものである。ただし、古文書は我々凡人の手には負えない。それを我々にでも辛うじて読めるように、翻刻したのが、故平田正範氏である。この「巡廻日記」翻刻文は、『上田宜珍日記 文化七年』 天草町教育委員会発行に収載されている。

また、膨大な伊能忠敬の「測量日記」も、熱意ある関係者のご努力により、原文はDVDで、さらに解説文も発行されており、容易に読むことが出来る。（伊能忠敬 e 史料

館）

ありがたいことだ。

「伊能忠敬測量日記」はDVDで簡単に閲覧できる。古文書と言え、難解でとつきにくい、伊能忠敬の筆は、くずし字を使っておらず、何とか読むことが出来る。忠敬の性格を表しているようにも思える。また内容も、科学者らしく、余計な記述はほとんどない。それが、後世の者が読むときに、物足りないと言えるかもしれないが。

解説編の解説では、次のように記してある。

「測量日記」の記述は、天候、作業内容、宿泊地、訪問した名所旧跡や、送迎・案内など接遇にあたった諸藩の役人、町村宿場役人の名前などの事実を淡々と記し、感想、意見、批判めいたことは、ほとんど現れない。一見、無味乾燥であるが、旅先で課業終了後、暮夜独り、受け取った名札を整理しながら、一日の経過を綴った忠敬の想いに心をはせ、行間から事実を読み取ってほしいと思う。

したがって、「日記」というより「日誌」というのが適当かとも思う。

そんな日誌的「測量日記」を補完するといつか、詳しく

補充するのが、宜珍の「測量巡廻日記」である。勿論、巡廻日記も、日誌的ではあるが、それでも、忠敬が記さなかった側面を記しており、この全国測量が、けっして忠敬の測量隊だけでは、この事業は出来なかったということを、如実に示してくれている。

忠敬の測量日記は国宝に指定されているという。宜珍の巡廻日記も、そういう点から考えると、せめて重要文化財的価値は十分あるのではなからうか。

また、別の観点から述べると。

映画の終わりに、エンドロールがある。映画によっては、うんざりするほど長々と流される。しかし、考えてみると、一つの映画を作るのに、いかに多くの人や団体が協力していることか。映画と言えば、普通表に出るのは俳優、それも主役級、そして監督や脚本家くらいである。

しかし、いくら実力ある俳優、監督、脚本家と言っても、彼らだけでは、一つの作品を完成することはできない。そこには、名もなき多くの関係者の「仕事」が無ければ、決して出来ないことである。

測量隊を物身両面からサポートした、天草の人々のことについては、両氏の日記からは分からないことも多いが、少なくとも、主役だけで成し遂げられた事業でないことは

明らかである。

そこで忠敬の測量日記と宜珍の巡廻日記の両書を借りて、忠敬測量隊と宜珍等の地元世話人の労苦の様子を含めて、紙上で再現することを試みた。なにせ、浅学菲才の身、解説文や翻刻文でも、理解できない所もあるが、小異はあっても大意には影響無いことを理解いただければ幸いである。なお、文書には、上田宜珍の名は登場しない。宜珍は号名であり、文中には「上田源作」として登場する。

『上田宜珍傳』の著者角田政治は語る。

我が国における明治維新前の科学は、概ね秘伝として伝わり、その普及を甚だしく嫌ったため、今日その状態を窺うことはけっして容易な業ではない。

伊能忠敬の沿海測量事業に至りては、よく人口に膾炙し、江戸時代における科学の偉績として特筆大書すべきものであらう。

この忠敬の偉大なる事業がわが天草郡に於いても行われ、しかも当時の郡中の偉材宜珍翁がこれに係り、その事業の遂行に尽瘁し、加えて忠敬・宜珍両雄の精神的投合が、畏敬と歓喜の間に於いて行われたる、奇しくも妙なる因縁を思えば、宜珍翁の事業中に忠敬の測量行を記述することは、欠くことが出来ない画竜

点晴であらねばならない。

忠敬が測量のため、九州地方に来るや、各藩ともに専心の待遇に努め、事業の遺漏なきを期した。殊に天草島は幕府の直轄地であるから、一層懇切にこの接待に注意を加えた。天草の代官は『測量方郡中御廻浦中御附廻』という名義で、中原新吾・酒井平太兵衛・吉田長平・橋口嘉左衛門・上田源作（宜珍）の五人にその接待役を命じ、その他宿舎掛、竿取等種々の役割を雑役者までも定めたのであった。

前記五人の接待役の中で、独り宜珍翁は人格・学問共に傑出していたので、忠敬の人格と学徳と事業とに對して私淑する処少なからず、忠敬もまた宜珍翁の篤学と熱心と誠意とに依頼して、測量中常に側近に随伴せしめて、測量に関する技術を教授したのである。よって宜珍翁もその道の蘊蓄を極め、後忠敬を介して若干の小測量器具までも購入して実用に用いた。

忠敬に附いて測量術を研究した人は甚だ多いが、実地に応用するために研究し、かつこれを実用に供したものは、宜珍翁と人見唯右衛門のみであったということである。

※人見唯右衛門 旗本で丹波柏原藩主小堀正徳（兵庫県丹波市）の手代。第八次測量の文化十一年一月二十

九日、福知山小堀中務手代として登場。（中務は正徳の通称）

大谷亮吉は『伊能忠敬』で、人見について次のように記している。

人見唯右衛門は京都の人（？）にして文化十一年忠敬が丹波地方より京都付近を測量せし際公職を以て案内の勞を執り且忠敬に就きて多少測量術を習得し後忠敬より小測器得て自らその学ぶ所を応用し丹波国周山村新開地の実測図を作れり。

かくのごとく忠敬は、宜珍翁の篤学と誠意とに感じて、始終力を尽くして指導したので、宜珍翁もまた忠敬の人格の高潔なるに私淑し、博愛同情心の厚きに感じて、最も懇親の間柄となった様である。宜珍翁が忠敬に送った歌に

伊能大人に奉る頌歌^{しょうか}

いやはかるきみが心の大八洲

めぐりつくしのおきつ島まで

あめつちをはかりはかりて萬代に
つたへつたへんみちはこの道

なお、この項の冒頭部分、『上田宜珍傳』の角田政治の言は、『伊能忠敬』大谷亮平編著の「序言」長岡半太郎理学博士の言であることを付記しておく。

その序言はかく言う。

維新前我邦に於る科学は概ね秘伝的に發達せるものにして其普及を図らざりしにより今日其状勢を窺うは決して容易の業にあらず独り伊能忠敬翁の沿海実測の事業は人口に膾炙し江戸時代科学の偉績として特筆大書すべきものなり。

※人口に膾炙 世間に話題になって有名になること。

上田宜珍の履歴と事績

上田宜珍は宝暦五年（1755）十月二十五日に、天草郡高濱村第五代庄屋伝五右衛門の二男として生まれた。（長子は二歳で早世）名前は源作のち源太夫、宜珍は号。

上田家の祖は助右衛門正信である。始祖は根津氏と称し、更に滋野氏と称したようである。慶長五年父左衛門尉政茂とともに、真田安房守昌幸に従って、紀州高野山下の九度山に蟄居していた。この真田昌幸の久度山潜居については、多く語ることもないだろうが、あえて述べると。

豊臣、徳川の天下分け目の戦いと言われる関ヶ原の戦いで、真田昌幸は豊臣方に組した。関ヶ原の戦場へ向かう秀忠軍を翻弄するなど、徳川から恐れられた真田昌幸は、死罪は免れ得ない所であったが、徳川の傘下にあった昌幸の嫡男信幸（後に信之と改名）や信幸の舅である本田忠勝の必死の除名嘆願で、死を免れ久度山へ蟄居となった。

やがて、大坂冬の陣が始まる直前、昌幸の二男信繁（幸村）は、久度山を脱出し、大坂へ駆け付けた。その中に、正信もいたのである。冬の陣に続いて起きた夏の陣で、大坂城は落城し、正信は辛うじて大坂を脱出し、天草へ隠棲する。

天草高浜をなんで選んだのか分からない。高浜に逃れた正信は、上田助右衛門と名を改めた。苗字の上田は、郷里信州の上田郷にちなんだものである。

天領天草の代官、鈴木伊兵衛重辰^{しげとむね}は万治元年（1658）八月、上田家第二代勘右衛門定正（定信の子）に庄屋を命じた。これが庄屋、上田家の租であり、その後代々庄屋が受け継がれた。

重辰がどのようにして、上田氏を見出したのか分からない。と言うより、かつて徳川に背いた上田氏に、庄屋職を命じた経緯も不明だ。あえて言えば、大坂の陣から43年も過ぎて居たこともあり、また優秀な人材（血筋）を求めて

のことだったろうか。

さて、宜珍は、初代高浜村庄屋から六代目となる。

庄屋見習いになったのは、23歳の時であった。そして庄屋となったのは、寛政元年（1789）、34歳の時である。

職にあること29年、文政元年（1818）隠居したが、完全隠居はできず、庄屋後見役を仰せつかったりで、文政十二年に亡くなるまで、世は宜珍を必要とした。

それでは、宜珍が生まれた当時はどんな時代であったのだろうか。徳川幕府が成立してから、すでに150年、あの天草島原の大乱からも約120年が経過し、戦国の気風はすっかり姿を消し、世は安定していたが、間もなく、波乱の世の中を迎えようとしていた。

全国的には、天明の大飢饉が発生し、天草でも島原大變、肥後迷惑と言われる地變や、異常気象、人口過剰、銀主の台頭、疱瘡の流行など、人々の暮らしは苦しくなる一方であった。庄屋宜珍にとって、心休まる時はなかったであろう。しかし、一方、文化文政の時代に入り、江戸文化が花開く時期でもあった。宜珍も、繁多な行政職の中にありながら、歌道を学んだり、「天草風土考」という歴史書を編んだり、文化面でも、超一流の活躍をした。

行政家としての宜珍

宜珍は安永7年（1778）24歳で庄屋見習いとなり、寛政元年（1789）に庄屋となり（35歳）、父が開発した高浜焼窯元も引き継ぐ。文化五年、大庄屋格（二代限り）に列し、帯刀御免（近代年譜には文化四年となっている）。

庄屋というのは、現在でいう市町村長といったところだろうが、現在の市町村長と違い、村政のみならず、収税、警察や司法（初歩的）も受け持っていた。さらに一村の事だけでなく、郡全体の諸問題にも取り組まねばならなかった。これは、郡役所に、役人が少なかったためである。特に、宜珍のような有能な庄屋には、仰せ付けられる仕事も多かったようだ。大変な激務であった。

庄屋として取り組んだ主な案件は次のようなものがある。

- ① 宗門心得違い事件の対応。文化二年（1805）、今富・崎津・大江・高浜の四力村で異法心得違い（隠れ切支丹）が発覚、その事件調査に苦勞・尽力した結果、事なかれに終わる。（天草崩れ）
- ② 漁業権の獲得。定浦制度下で高浜村は漁業権がなかった。そのため、定浦の下請け程度しか漁業に従事できなかったが、幸い他の定浦の株が売りに出されていたのを獲得、漁民のために漁業権を獲得した。
- ③ 高浜村に疱瘡が大流行した際の処置。文化四年から

翌春までに罹病者は180余名に及ぶ。当時、疱瘡はコレラとともに、死の病として恐れられていた。

宜珍は、医師の宮田賢育に頼み、隔離山小屋に遣わし、治療に当たる。そのため沢山の人の命を救う。

④ 百姓相^{あいづき}続方仕法の実施。同仕法は、銀主に田畑を取られ困窮している百姓を救う徳政令である。幕府よりこの加役を他の庄屋22人の一人として奔走する。

⑤ 庄屋の一番の役目は、年貢を滞りなく納める差配をすることだが、この業務を凶作の時でも、督励相納めたとして、度々お上より褒賞を受けている。

⑥ 伊能忠敬の測量に随行・測量術を学ぶ。伊能忠敬は幕府の測量方として全国測量をしていたが、文化七年（1810）天草測量を実施した。宜珍はこの接待役の一人として、ほぼ全ての行程に随行した。ただ接待をしただけでないのが、宜珍の非凡なところであつかり？測量術を学ぶ。

⑦ 文化十一年（1414）高浜村で115軒も焼失する大火が起きた。宜珍の役宅も八幡社も焼け、一面焦土と化した。この大火後の村再建にあたり、宜珍は、伊能忠敬に学んだ測量術を生かし、延べ7千500人を動員し、町の区画整理や往還を方形に整備した。

産業家としての宜珍

陶山経営と高浜焼

高浜村には、現在でも日本一の高品質を誇る陶石が産出するが、この陶山を開発し、焼き物を始めたのは、宜珍の父伝五右衛門である。宜珍は、父の皿山の陶山経営を引き継ぎ発展をはかる。

高浜村は、天草でも西の辺鄙なところで、陶石を販売するにも製品を出すにも、交通の利便に恵まれていないことがネックである。しかし、それにもめげず、様々な努力も重ね、優れた製品を産みだす。また、陶石の販売にも、努力する。

経営にも力を注ぎ、「陶山永続方定書」「陶山遺訓」を著し、経営の発展を計る。これらの努力は、宜珍の個人的利益の為でなく、貧しい百姓たちのために為したことで、天草初の産業家といえよう。

更に宜珍が偉いのは、他国の焼物師に秘伝を伝授する心の広さである。文化四年、後に尾州瀬戸焼の中興となる加藤民吉が、南京焼（磁器）の秘法を探るため、宜珍の窯に修業に入る。これには、民吉の故郷の縁を頼って東向寺の天中和尚の仲介による。

そして、民吉の熱意にほだされ、ついに南京焼秘伝（赤絵錦手秘法）を伝授する。民吉は、この技術を瀬戸焼に生かし、

瀬戸焼の中興の祖とよばれるが、宜珍こそ中興の祖師そのものである。

文学者・歴史家としての宜珍

「天草島鏡」「庄屋日記」を著す。

宜珍は、庄屋としての激務の傍ら、儒学・国学・歌道を学ぶ。

歴史書としての「天草風土考」「天草年表事録」等著し、史料を集成して『天草嶋鏡』を編纂した。と言えば簡単だが、いかに宜珍と雖も、元より歴史についての知識があつたわけではなく、古来からの史料に基づかねばその知識は得られない。今日よりはるかに劣る資料収集の条件下で、しかも辺鄙な村に於いて、如何にしてその史料の収集が出来たのか。

そして恐らく得たであろう、断片的な史料を元に、一つの体系的な天草史を編んだ宜珍、恐るべき。

今日の学者でも難しいことを、繁多な行政職の傍らに成し遂げた宜珍の非凡さ。博識者と言われる平賀源内などは、宜珍の足元にも及ばなかったかもしれない。（などと想像するほど。もつとも平賀氏と比べることは乱暴だが）

文人としての宜珍

さらに歌人として歌集「嶋乃藻屑」及び「天草島長歌（三篇）」を遺した。（「嶋乃藻屑」は上田宜珍傳、「天草島長歌」は天草島鏡に収録）。

天は二物を与えずというが、時として、二物どころか数物を与えている。

その数物を与えられたのが宜珍。宜珍の文学は、現在でいうところの和歌である。ただ、残念ながら、筆者にとつて、宜珍の詩が、上手いのか下手なのか判断できない。

宜珍は、歳若くしてこういう学問に取り組んだようである。これまで多くの師について学んでいたが、終世の師となるのが、本居太平であった。本居というと本居宣長だが、太平はその宣長の猶子である。その太平に師事したのが、何と宜珍64歳と言うから恐れ入る。今日の的に64歳というと、会社を定年退職して、何か学ぼうかと思う歳頃だが、当時の64歳はいつ死んでもおかしくない時。

宜珍は太平に学ぶ前に、熊本藩校時習院の教授藪孤山や高本紫溟、渋江宇内、歌人田中忠雄等、多くの人に就いて学んでいる。ただし、注目すべきは、天草の西岸の辺境の地にいる宜珍は、当然面接して教えを受けることはできなかった。つまり、今日でいうところの通信教育による授業であった。別の見方をすれば、当時でも相当の通信制度、飛脚が発達していたことが分かる。

なお、田中忠雄は、天草富岡の人で春秋亭と号した、彼の墓碑は富岡の寿覚院西生庵跡にあり、その碑には「わが跡を問ふ人あらば白雲のかゝると告げよ峰の松風」の辞世の句が刻まれているというが、石碑は劣化剥離し読むことはできない。（苓北町史）西生庵跡には、寛政地変の供養塔も建っている。

宜珍は、辺地天草にあつて、歌人として中央にも名を知られた存在であつたという。

ただ、宜珍の遺した歌を読んでも、悲しきかなよく理解できないのが、凡人の悲しさである。

特筆すべき庄屋日記

さらに特記しなければならないのは、「天草郡高浜村庄屋日記」を残していることである。上田家には、膨大な文書いわゆる「上田家文書」が残されているが、その中でもこの庄屋日記は特に、後世の我々に対する、贈物とも言える貴重な歴史資料である。

この日記は宜珍が庄屋になつて4年後の寛政五年（1793）から隠居する文政元年までの26年間の庄屋としての公私の記録が綴られている。残念ながら数年間の日記は失われているようだ。

この日記の原書は勿論閲覧できないし、仮に閲覧しても解読不能だが、故平田正範氏の翻刻・天草町教育委員会（天草市合併前）発行の書籍によつて、我々でも読むことが出来る。ただ、全20冊にもおよび、全冊を手に入れることは資金の面で不可能のため、筆者の手元には数冊しかない。ただし、読もうと思えば、図書館で読むことは可能だ。

伊能測量隊巡廻日記も、この翻刻日記の文化七年に収録されている。当書にも、巡廻日記の他に、庄屋日記から測量に関する部分を抜き出している。

翻刻とはいえ、少々読みづらいことはあるが、読むというより、目を通すだけでも、当時の様子が彷彿としてくる。

日記と言えば、山方番役の「江間新五右衛門日記」も貴重な史料である。この江間日記も、故松田唯雄、森下安雄、松田功、平井建治氏らの努力で、翻刻本が出版されている。

この「上田宜珍日記」、「江間日記」の二つが、天草二大歴史日記といえよう。

上田宜珍墓碑

宜珍は、文政十二年（1829）九月二十五日歿（享年七十五歳） 生家を見下ろす荒尾山下の墓地に眠る。その墓石には、大城允による叙文が刻まれている。

俊倫院謙山良温居士

昔賢有言曰一命之士苟存心於愛物於人必有所濟者夫上田翁之謂乎翁為高浜里正也務察民瘼興利除害民蒙其沢蓋有得之於我孤山藪子也天草旧隸島原寛政中島原侯褒其治績賜銀若干後數賜金銀及衣服以報其勞寛政十一年侯賜謁見文化五年賜銀十枚許侃刀班大保長蓋 台府之命也後天草隸長崎代官代官亦賜金及上下服褒之長崎奉行亦賜銀八枚翁之父諱武弼始陶於高浜至翁薨器益精緻里民賴以為生者多矣文化十年獻其薨器我 少将老公公喜賜白嶋石之插花甌及其台以報之翁諱宣珍称源太夫姓上田本姓滋野親王之裔居信濃者有以祢津為氏者是其先也其後上田助右衛門者属豊秀頼保大坂城城陷元和三年來天草居高浜翁之七世之祖也翁為人敦厚若而好學受業於孤山藪子後学和歌及国学於本居氏本居氏撰鰥玉集也載翁之歌數十首梓行于世翁集其所詠曰島藻屑本居氏以文冠其首所著有天草風土考文政十二年九月廿五日終享年七十有五法諡曰俊倫院銘曰く



上田家墓地より眺めた高浜現景
正面奥が上田庄屋屋敷

敦篤好学 以身導民 就利除害
懷其慈仁 旁好和歌
優遊終身 惟諷惟詠 月夕花晨
志尚之高 実吏隱倫
以銘貞石 令名不泯
大城允撰

上田宜珍略年譜

宝暦 四年（1754）

父勘右衛門、砥石山採石を始める。

宝暦 五年（1755）

十月二十五日、高浜村庄屋上田家に生まれる。

宝暦十二年（1762）

父傳五右衛門、鷹巢山で陶磁器製造を始める。

安永 七年（1778）

高浜村庄屋見習いとなる。

傳五右衛門、長崎出島で高浜焼の販売を始める。

寛政 元年（1789）

高浜村庄屋（六代目）となる。（上田家としては七代目）

寛政 四年（1792）

島原藩主より褒美として銀5両下賜される。

雲仙眉山崩壊・被災者救助の為、大麦を集めて、栖本組、大矢野組に送る。

寛政 六年（1794）

宜珍の父、傳五右衛門（六代目庄屋）死去。

寛政 八年（1796）

百姓相続方仕法方掛り加役を、庄屋22人のひとりとして仰せ付けられる。

寛政 九年（1797）

島原藩主より御杯御肴を頂戴する。

島原藩主より天草郡巡視の節銀子3両賜る。

寛政 十年（1798）

ご褒美として銀34匁賜る。

雲仙崩れによって高浜に流れ着いた流死者を海岸に仮埋葬していたのを隣峰庵に埋葬し、篤く供養する。

日田代官俵物御用の御廻浦の案内役を仰せ付けられる。

寛政十一年（1799）

松平主殿守より前年の日田代官の案内の功により銀3両賜る。

〃 より村治上の功勞に付、福連木村庄屋尾上文平と共に御紋付拝領する。

島原城にて松平主殿頭御目見得仰せ付けられる。同時に金子2百匹賜る

寛政十二年（1800）

天草風土考編纂に着手する。

享和 元年（1801） 46歳 焼物山事業継続願出す。運上賃48匁にして来年より13年間とする。

今富村庄屋兼務を仰せ付けられる。

享和 二年（1802） 47歳 城木場村松山氏子の順一郎（信親）を養子とする。宜珍の娘佐保と婚姻。

米相場の儀に付き、御領組庄屋長岡五郎左衛門、津留村庄屋蓑田文三郎と共に富岡より熊本へ渡る。

宜珍の弟友三郎・定温（宜珍に子無きのために養子となっていた）に今富村庄屋仰せ付けられる。

「天草風土考」編纂終了

儒学の師藪孤山（時習館教授）没す。

享和 三年（1803） 48歳 年貢米俵拵米仕立て入念かつ升目正しい等で褒美として銀3両賜る。

文化 元年（1804） 49歳 去年夏の水害による損所の修理に力を尽くしたことで金2百匹を褒美として賜る。

加藤民吉、東向寺の天中和尚を介して、宜珍の製陶工場への入所を受け入れる。

文化 二年（1805） 50歳 村内外御用御普請所御用免切替方法相続に付いて最も精を入れ務めたとして、島原侯より金百匹賜る。

大江村・崎津村・今富村に於いて異法心得違いの者ありとして、松平兵庫頭より取調べ掛を命じられる。

高浜村に於いても異法心得違いの者取調べに苦心する。

お拂米に付いて最も力を尽くしたとして、金2百匹賜る。

運上金50目を出し高浜村民のため漁業権を獲得する。

（従来の漁場は崎津村の下稼ぎにして、崎津村に運上賃を出して漁業に従事していたため、甚だ不便であった。）

文化 三年（1806） 51歳 村治上の功績大及び旦那方紛擾に際し実直に取り計らった功により、銀5両賜る。

高浜村の川を小川に至るまで測量。及び近村等への里程を測量改める。

文化 四年（1807） 52歳

高浜村庄屋としての功勞、功績に対し金百匹賜る。
また、昨年の凶作にも拘わらず、年貢米等督励に努めたとして褒詞賜る。

瀬戸の陶師加藤民吉に、南京焼の秘法を授ける。

ミカン及びミカンの木を島原候へ献上したことにより、富岡役所より金2百匹賜る。

高浜村で大流行した疱瘡患者の救済のため、医師宮田賢育を頼み、その救護に尽力する。

文化 五年（1807） 52歳
庄屋として能く精勤し、村治はもとより郡中の紛擾を大庄屋と合わせ力を尽くしたとして、金百匹賜る。

潜伏切支丹の検挙に功ありとして、白銀10枚を賜り、佩刀を許され大庄屋役に列せられる。

砥石山採掘を願い出る。これは困窮の百姓に耕作の余暇に産業を与えるためである。

文化 六年（1809） 54歳
疱瘡大流行に際し、予防・治療に苦心して多大な力を尽くした功により、銀1枚を賜る。

「天草風土考」末尾に島原の儒者松野本校跋文する。

文化 七年（1810） 55歳
『陶山永統定書』を規定し『陶山遺訓』を著し、高浜焼きの発展繁栄を図る。

幕府測量方伊能忠敬らの来島に付き、その打ち合わせの為、中原新吾とともに薩摩串木野、甕島に渡る。

測量方一行伊能忠敬ら薩摩獅子島より太多尾村に来島。その後53日間の、忠敬測量に随行し、測量術を学ぶ。

右功勞により、島原候より金子2百匹賜る。

高浜村の山谷海辺の方位間数等調査し、同村地図を作る。

文化 八年（1811） 56歳
伊能忠敬測量に功ありとして、金2百疋賜る（島原公よりも賜りありとして些少）

普請役の浦々取り調べ（唐への俵物輸出）東筋廻村に同行。

天草郡各庄屋の帯刀願いのため島原公に陳情する。

文化 九年（1812） 57歳
村治上は勿論、郡内のもみあい等にも常に關係し、円満に解決した功少なからずとして金百匹賜

る。

御仕法出精相勤めたる功により、金2百匹賜る。

文化 十年 (1813) 58歳
村治上の功績はもとより、郡中の諸事を大庄屋と協力して解決した功等により白銀5両賜る。

国学の師高本紫溟(時習館教授)没する。

甕器高浜焼きを細川老公に献じる。

文化十一年 (1814) 60歳
高浜村大火。 宜珍自宅も焼ける。類焼総数115軒。

焼け跡の整備をして区割りを整備、往還筋を縦横に定め、宅地を整備。焼失した高浜神社を高台に移転。工事に要した人夫7千473人。

宜珍と懇意の菊池の儒者渋江松石(宇内)死去。

文化十三年 (1816) 61歳
本戸組戸宇土村の枝郷海老宇土の隣郷7か村との山林係争中のところ、宜珍の苦心斡旋により示談解決する。

右件に功有りとして金2百匹賜る。

文化十四年 (1817) 62歳
陶土を採掘して他国への販売を願い出る。

文政 元年 (1818) 63歳
大江組大庄屋に松浦平八郎が相続したが、宜珍がその後見役を仰せつかる。

理由は、異法信仰の恐れありと、唐船紅毛船等の渡来することによる。

庄屋役を信親に譲り隠居。 庄屋役30年。ただし、後見に努めるよう仰せられる。

※信親は宜珍の養子にして、宜珍の娘佐保の夫。

文政 二年 (1819) 64歳
本居^{もとけい}太平(本居宣長の猶子)の門に入り、国学・歌道に精進する。

天草郡村々の砲台建設に付献金した褒美として銀7枚賜る。

休息所安戸を作り移住する。これより後見役となる。

文政 三年 (1820) 65歳
今富村庄屋定温、嫡子定行(16歳)に役を譲り致仕する。

文政 四年 (1821) 66歳
崎津村庄屋吉田龍太郎若年に付き、後見役を命ぜられる。

文政 六年（1823）67歳 高浜村庄屋信親、室佐保子の歿に逢い、今富村の庄屋定行と交代し、今富村庄屋となる。

高浜焼きを天草郡中に於いて一手販売することを願い出る。（高浜焼きの皿山維持困難につき、郡中の産業を奨励して郡民に授産の便を与えるため）

『天草嶋鏡』完成。本居太平序文を贈る。

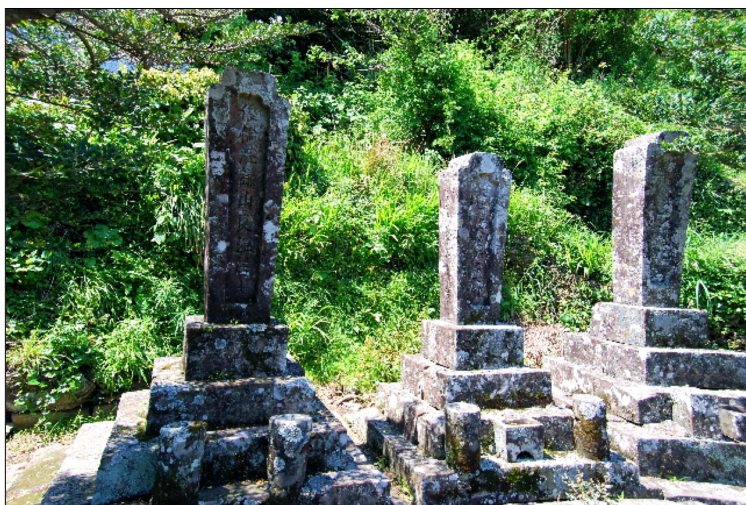
文政 八年（1825）68歳 上田定温死去。

文政十二年（1829）74歳 高浜村庄屋の後見役を辞す。

九月二十五日、**宜珍卒**。高浜村荒尾山下に葬られる。俊倫院謙山良温居士。

《資料》 『上田宜珍傳』 「上田宜珍伝」 角田政治著

『天草近代年譜』 松田唯雄著



上田宜珍の墓（左） 中は妻、左は友三郎の墓
天草市天草町高浜

上田家・旧庄屋屋敷

上田庄屋屋敷に泊まった忠敬は、測量日記に「止宿庄屋源作（家作広よし）」と記している。ただし、忠敬の泊まった屋敷は、文化十一年の高浜村大火で焼失し、その後再建されている。

《屋敷説明板》 上田家の由来

この建物は七代目当主、上田源太夫宣珍の時代、文化十二年（1815年）に建築されたものである。

約六百坪の土地に南向きに立てられ、大広間（十七畳）、中之間（十二畳）、居間（十二畳）、表座敷（十二畳）、奥座敷（八畳）、裏座敷（九畳）、離座敷（十二・五畳）など約百畳の広さと、部屋数は、約二十室におよんでいる。天井は非常に高く、二間半ほどの高さである。

家の材料は、シイ、マツなどの雑木を使い、がっしりと構築され、海からの強い西風や台風にはビクともせず長年の風雪に耐えてきた。

山を背景に斜面を生かした庭園は、天草の中でも第一級のものである。このような旧役宅がそのまま現存しているのは歴史的、建築学的にも実に貴重な文化財である。

（文化庁 登録有形文化財）



上田庄屋屋敷（役宅側）

天草市天草町高浜